

実践報告

札幌市立上篠路中学校

継続研究 4 年目

(1) 研究内容

研究課題：「子どもの権利に関わる学習活動」

- ・ともに学び問題解決に向かうことができる生徒の育成
～自己肯定感や自己有用感をもち、行動できる生徒の育成～

(2) 実践の内容

【実践①】1年間に3回、全学年の道徳でピア・サポートトレーニングを実施

○ ねらい

道徳教育及び「道徳の時間」の意義と目標を踏まえ、道徳的実践力の育成に資する活動としてピア・サポートを取り入れることにより、相互を思いやり、助け合い、支え合える人間関係について考え、行動できる。

○ 学習内容

- ・全体計画

	年度初め	1 学期	2 学期	3 学期
1 年	全体計画	ピア・サポートとは	怒りの感情	すてきな聴き方
2 年		すてきな頼み方	上手なコミュニケーションの取り方	AL´S の法則 1 (対立解消の方法)
3 年	推進計画	AL´S の法則 2 (対立解消の実践)	話し合いでの解決を目指そう	ピア・メディエーション

※AL´S (アルス) とは、Agree (合意する)、Listen (聴く)、Solve (解決) の略称。
対立問題に対して三つの段階で解決していく方法。

- ・「ピア・メディエーション」を目指した授業

近隣の中学校に公開の案内を配布し、「人権」や「子どもの権利」・「道徳」の在り方について、交流の機会を設けた。特に「ピア・メディエーション」は対立する両者の間に入り、公平に耳を傾け「両者の合意点を探って解決に導く」ことを目的として、生徒を主役として、生徒間の人間関係の不調(いじめなど)を、生徒の力によって互いに折り合いのつく形で決着できることを目標に実践を重ねている。

- ・既存の活動との連携

本校独自の取組である、「有志による合唱」や小学校へ生徒会が訪問して、中学校の様子を紹介する「小中連携事業」など、既存の活動にピア・サポートの考え方を取り入れ、同学年や同校種だけではなくピア(仲間)が仲間を支え合う取組を行った。また、今年度からできた特別支援学級の生徒のために、グラウンドの一部に小さなスキーの山を部活動の有志(ピア)が作成した。これらの活動により生徒



には自己有用感が少しずつ育ち始めている。

【実践②】外部との協働による実践について

○ ねらい

本校のピア・サポートに対して、職員研修が平成 23 年からスタートしている。外部の研究団体が行う、「研究会」に参加することで基本的なスキルを習得し、実践例を校内の研修会等で教職員に広め、同じような実践をしている学校と情報を共有化することで、取組の深化を図っている。

○ 学習内容

- ・校種を超えた、近隣の学校との交流

英藍高校には生徒会の外局で「ピア・サポート局」がある。本校の生徒会と交流することで、本校生徒の刺激になるばかりでなく進路への意識付けや、自主的な生徒会活動への関心も深まるといった副次的な効果もあった。



- ・職員研修の継続

毎年、長期休業中に行われるピア・サポート研修に教職員が参加し、受講してきた内容を研修会で他の教職員に還元することが定着している。そのため、職員構成が変わっても本校独自の取組やその意義が薄れることなく継承されている。

(3) 研究のまとめ

① 成果

- ・健全育成推進会と連携して「命の大切さ」の講演会を行った。本校卒業生が JICA の活動を通じて知った、発展途上国の子どもの様子から、他の国の仲間（広義のピア）の痛みを共有できた。
- ・文化系部活動の有志が、札幌市教育委員会が主催する中学校文化系部活動等スポーツ大会に参加し、助け合いながら活動することができた。



② 課題

- ・道徳の教科化に伴い、更に人権教育との関連付けを深めること。
- ・身に付けた知識や考えを表現することや、コミュニケーション能力の育成を図る。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- ・人間関係の希薄さや未熟さに起因する学校課題が多く、自ら解決に向けて取り組む力を育みたい。ピア・サポートを踏まえた学習や活動を核として、関わりを大切にし、互いの権利を尊重しながら思いやりの風土と自尊感情を高めることが大切である。
- ・生徒にいじめを許さない雰囲気浸透させるために、教職員一体となつての組織づくりや場の雰囲気づくりを大切にする。